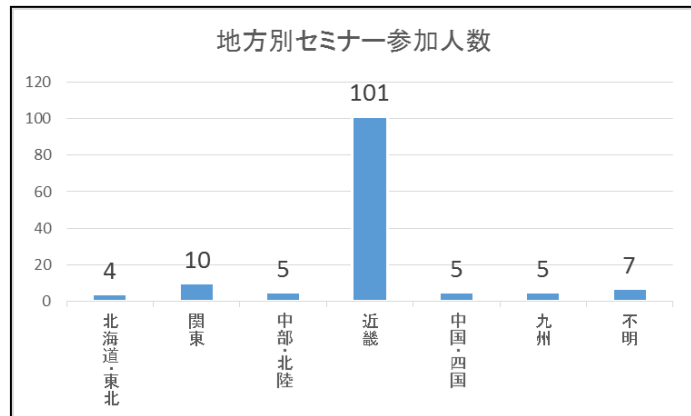


2014 年度 E.FORUM 教育研究セミナーⅡ
「高大におけるカリキュラム改革を考える——探究力育成の視点から——」
実施の様子

2014 年 12 月 23 日(火・祝)、京都大学にて「E.FORUM 教育研究セミナーⅡ」を開催いたしました。年末の慌ただしい時期にもかかわらず、北は北海道から南は宮崎県まで、総勢 137 名の方にご参加いただき、盛況のうちに終えることができました。



● **開会挨拶 北野 正雄 氏（京都大学教育・情報・評価担当理事、副学長）**

はじめに、司会の駒込武教授から本セミナーの概要説明があり、続いて京都大学教育・情報・評価担当理事の北野正雄副学長より開会の挨拶がありました。挨拶の中では、現在、京都大学で取り組まれている高大接続・入試改革・教養改革についての紹介がなされました。



● **基調講演：「大学教育改革の前提**

——あふれる言葉、激震する構築、前のめりの改革実践のもとでかんがえる——」

寺崎 昌男 氏（東京大学名誉教授、立教学院本部調査役）

大学教育改革に取り組む上で検討すべき論点について様々な観点からご提示いただきました。寺崎氏は、東京大学附属中高等学校校長、立教大学全学共通カリキュラム運営センター部長などを歴任され、現在も立教学院本部調査役を務められており、その経験に裏打ちされた含蓄のある言葉に、多くの参加者が触発されました。



<参加者の声>

- ・寺崎先生の話聞いて、今からどのようなことを考えていくべきか、実践すべきことが良くわかりました。まだまだ探究活動を行う上で、大切なことがたくさんあることに気づきました。
- ・寺崎先生の大学で探究力の育成を保障するのは安易ではない～等、(大学)指導者側の普遍性と学生の個性の二つの関係性を図式化して示していただき、いつも疑問に思ったりしている事が、よく理解できるようになった。特に学生による批判やうたがう力が、つまりは、オリジナリティや創作性を含む事であるとよく理解できた。

●シンポジウム

本セミナーのテーマに沿って、4人のシンポジストよりそれぞれご専門の立場から問題提起をしていただきました。

① 「能力形成をめぐる高大での教育改革の動向」

(担当：松下 佳代 氏 京都大学高等教育研究開発推進センター・教授)

1990年代以降、さまざまな形で提唱されるようになった「新しい能力」について、その内容を概観した後、能力と能力形成をめぐる論点をご提示いただきました。



② 「探究を支える文化——人文系の場合——」

(担当：稲垣 恭子 氏 京都大学大学院教育学研究科・教授)

探究について「まなび」型の探究と「背のび」型の探究という2つの型で捉え直し、両者が内包するジレンマについて考えました。またそれらのジレンマを最小化するための方法論についてもご提示いただきました。



③ 「中等教育における探究の指導」

(担当：松井 孝夫 氏 群馬県立中央中等教育学校・教諭)

前任校である尾瀬高等学校で実践された探究活動の取り組みをご報告いただきました。また SGH に指定された群馬県立中央中等教育学校での現在の取り組みについてもご紹介いただきました。



④ 「探究の作法と研究倫理」

(担当：中村 征樹 氏 大阪大学全学教育推進機構・准教授)

他者との関わりという視点から探究作法や研究倫理について考えました。単に研究不正を行ってはいけないということだけではなく、得られた研究成果を他者が信頼し、さらに研究を進めていけるような探究の作法の重要性をご提示いただきました。



● 全体討論

シンポジウムの後、再び寺崎氏も加わって全体討論を行いました。フロアからも意見が寄せられ、探究力をどのように育成するかについて議論がなされました。



● 閉会挨拶

最後に、子安増生教育学研究科長より、閉会の挨拶があり、本日のセミナーの総括をいたしました。



<参加者の声>

- 様々な立場、観点からの話が聴けてとても楽しかった、というのが素直なコメントです。高大接続というよりも、ひとりの人間がもつ「力」をどのように受容し、期待し、「正しく」評価することができるのか、という教育学的なテーマだったと思います。
- 探究力を育成することのポイントは、「待つ」・「往還」・「テーマを自分で決める」・「モチベーション」であったかと思いますが、その入り口にまさに立ったところで終わったことで、大きな宿題を頂きました。ありがとうございました。
- とても参考になりました。大学の先生の見解、高校で探究活動に携わっている教員の見解、実践報告もあり、勉強になりました。やはり与えすぎるのではなく、生徒自らテーマを考えさせるように「待つ」ことが大事なんですね。